

県外からの招聘医師の活躍



岩手県立宮古病院
前川裕子先生【徳島県出身】

東京大学医学系研究科博士課程（中退）を経て2006年千葉大学医学部卒業。東京の榊原記念病院勤務時に東日本大震災に遭遇、2011年6月に宮古病院へ。2016年より同病院循環器内科科長。

患者の全てを支えるのが地域医療。 「ありがとう」の一言が励みです。

あの東日本大震災に衝撃を受け、自分に出来ることはないか自問していました。そんな折、医療系サイトで当時の岩手医科大学長が「長期的に支援に来てくれる医師を求める」と発していることを知り、自ら大学へ連絡。短期支援ではなく、真の意味で被災地医療を支えたいと勤務していた都内の病院を辞め、震災から3ヶ月後に宮古病院に赴任しました。私の専門は循環器疾患ですが、当時の宮古病院はたった一人の医師が循環器内科を支えているような状況。その先生と二人三脚で診療科を立て直すべく奮闘し、現在は科長の私を含め5名体制で緊急治療に

も対応できるまでになりました。

地域医療の魅力は、患者さんの生活そのものを支えられること。病気を治して終わりではなく、それぞれの環境や家族を含めた背景を知ることによって次の治療に繋がっていくし、何より皆さんから「ありがとう」と言われる瞬間にやりがいを感じています。患者さんはもちろん病院スタッフも温かく、医師として必要とされている充実感も大きいですね。

宮古病院での10年は、がむしゃらに患者に向き合いつつ、循環器内科の復活にも関わることができました。現在、長く診てきた患者さんの中には病院まで来られなくなる方も増えています。向き合っていくには相当な覚悟も必要ですが、いずれは訪問診療にも取り組んでいくのが私の最終目標です。

病院長Message

医師として急性期の情熱を未だ忘れず、患者一人ひとりの幸せは何かという根本的な部分を大事にするのが前川先生。その診療態度は本院スタッフの尊敬を集めています。また病院外に出向き健康教育にも取り組むなど、まさに地域医療の最先端を担ってまいります。今後も先生の力を十二分に發揮してもらいたいですね。



岩手県立宮古病院
院長 吉田徹



岩手県立山田病院
鈴木宏昌先生【東京都出身】

筑波大学医学部を卒業。震災当時は茨城県の茨城西南医療センター病院の救命救急センター長を、DMAT後は帝京平成大学の教授に就任。2021年4月より、県立山田病院総合診療科に勤務。

DMATで知った山田町の現実と課題。 医師として地域の役に立ちたい。

東日本大震災発災直後からDMATとして山田町へ。私は長く救命救急医療に携わってきたのですが、今回のような津波災害では治療すべき負傷者はほぼ皆無で、入院患者の搬送に明け暮れました。任務終了後は大学で教鞭を執っていましたが、「あの時、他にできることはなかったか」という思いが常にありました。その後も山田町を何度か訪れましたが、建物は新しくなっても地域の復興にはほど遠い。そんな時、岩手県が65歳以上の「シニアドクター」を募集していると知り、自分にできることがあればと思いき手を挙げました。

岩手県に来て感心したのは、県立病院が地域の基幹病院として機能し、県内26カ所の県立病院をつなぐ医療ネットワークシステムが構築されていること。どの病院からでも患者の検査データやレントゲン、CTや診療情報まで閲覧することができ、その患者がどんな状態だったか、検査や治療を受けて経過はどうだったかを転院先でも詳細に把握できるのです。震災時に全国から応援医師の受け入れがスムーズに進んだのもこのシステムが機能したからですし、県単位でこんなネットワークを実現できていることは本当に素晴らしいです。

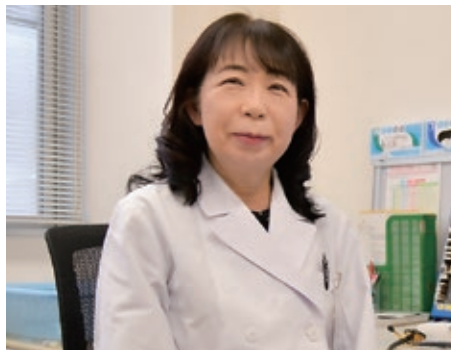
社会が多様化するなか、どんな場所でどんな風に働くかは個人の自由です。年齢を重ねてなお私のように現役医師として働くのも、これからの生き方のモデルケースになるかもしれません。

病院長Message

鈴木先生は救急が専門ですが様々な知識を持ち合わせており、総合診療をお願いしています。医療への向き合い方や処置の仕方などは申し分なく、私たちとは互いに教えあういい関係ができています。なにより人当たりが柔らかく「話しやすい」と患者からも好評ですね。訪問診療にも取り組み、地域に溶け込んでいます。



岩手県立山田病院
院長 宮本伸也



盛岡市立病院
加藤智恵子先生【宮城県出身】

岩手医科大学に進学、第一内科と大学院で研鑽を重ねる。山形県立中央病院を経て、富山大学第三内科（消化器内科）ではヘリコバクター・ピロリ感染症の治療ガイドラインづくりに携わった。

医師の経験と知見を故郷のために。 つながりを実感しながら患者に向き合う。

幼少期から盛岡で暮らし、岩手医科大学に進学し、大学院での研究と病院での研修を重ねました。その後は富山大学第三内科に勤務、富山時代は研究テーマであるヘリコバクター・ピロリの除菌による胃がん抑制効果を検証していました。充実していましたが、研究に一段落が付き、次は故郷のために働きたいと思うようになりました。岩手県医師支援推進室は、富山赴任当初より定期的に岩手県内の病院の情報を知らせてくださっており、岩手での勤務先を検討するにあたり、たいへん助かりました。岩手医大の医局の先

輩である加藤章信院長からもお声がけをいただき、盛岡市立病院に勤務することになりました。

久しぶりの盛岡ですが、院内には先輩や同級生がたくさんおり、開業医の先生も専門を含めてよく存じ上げているので、患者さんの紹介もしやすいです。勤務する市立病院もとてもアットホームな雰囲気で、例えば消化器内科を受診した患者さんが、血液検査やX線検査で消化器疾患以外の異常があるとき、医局で昼食をとりながらどのような対応がいかなど専門の先生に気軽に相談できます。そのような風通しのよさがとてもよく、医師として働きやすさを感じています。

ヘリコバクター・ピロリについては研究が進み、すでに除菌治療も保険適用になりましたが、未だ胃がんの罹患者は年間12万人以上います。少しでもこの数を減らすため、専門医として啓発に取り組んでいこうと考えています。

病院長Message

智恵子先生は、日本のヘリコバクター・ピロリ感染症のオピニオンリーダーの一人。当院では啓発も含めた健診活動にも取り組んでいただき感謝しているし、医師や職員同士の「和」を大事にするという病院の理念をよく理解してくれています。当院の目指す「治し支える医療」を実現していくためにも欠かせない方です。



盛岡市立病院
院長 加藤章信